

近世大名による和歌の学びと交流

—岡山藩・池田綱政と広島藩・浅野綱晟—

福留瑞美

はじめに

近世大名である池田綱政（1638-1714 備前岡山藩池田家二代目藩主）と浅野綱晟（1637-1673 安芸広島藩浅野家三代目藩主）は、隣国という地理的条件の近さだけではなく、似たような経歴をも有している。下段の《表1》略年譜に示したように、家格や出生年も近く、浅野綱晟の方が数え年で一歳年長であり、元服・叙位や家督相続が行われた年も共通する。それだけではない。二人は、和歌と蹴鞠の家元飛鳥井雅章（1611-79 従一位権大納言）に師事しており、ともに歌鞠門弟となっている。そこで本稿では、史書・記録類だけでは知られていなかった継嗣時代（寛文十年前後）¹⁶⁷⁰の池田綱政と浅野綱晟の二人が、書状や和歌などを通して密に交流を行っていたということや、飛

《表1》略年譜

岡山藩・池田綱政（1638-1714）	広島藩・浅野綱晟（1637-1673）
1638年1月5日、誕生 （父：備前岡山藩主池田光政）	1637年4月29日、誕生 （父：安芸広島藩主浅野光晟）
1653年12月2日、元服し偏諱を賜り、 従四位下、侍従、伊予守	1653年12月11日、元服し偏諱を賜り、 従四位下、彈正小弼
1672年6月2日、父光政が隠居し、 35歳で池田家二代目藩主となる。	1668年12月27日、侍従、彈正大弼
1682年5月23日、父光政死去（享年74）	1672年4月18日、父光晟が隠居し、 36歳で浅野家三代目藩主となる。
1689年、左近衛少将	1673年1月2日、江戸桜田屋敷にて 痲瘡により死去（享年37）
1700年、御後園（後楽園）造営完成	1693年4月23日、父光晟死去（享年77）
1714年10月28日、死去（享年77）	

* 網掛け部分が今回扱う年代（寛文10年前後）に相当する。

鳥井雅章からいかに和歌を学んでいたのかというその一端を明らかにしたいと考えている。

一、池田家旧蔵の浅野綱晟書状および詠草資料

明治時代の池田家で管理され「故御廟御宝庫 松平彈正大弼様御筆 歌六枚 附属御書翰共」と記された包み紙でまとめられた浅野綱晟筆の書状や詠草類が、林原美術館に所蔵されている。これらは、藩主池田綱政に関連する資料として、つまりは池田家の宝物として管理されてきたものの一つである。その内訳は次の通りである。

《資料1》浅野綱晟年始書状（寛文十年）正月七日付 池田綱政宛 【書跡267-2。折状一通32.1×44.0cm】

《資料2》浅野綱晟詠草二十首 【書跡267-3。折状一枚82.2×40.8cm。冒頭「詠草二十首 綱晟上」、末尾「寛文十年二月初出来」、秋冬題・「海路」「祝」】

《資料3》浅野綱晟書状（寛文十年）十一月廿四日付 池田綱政宛 【書跡267-1。折状一通31.7×45.2cm】

《資料4》浅野綱晟詠草五十三首 【書跡267-5。巻状一枚・縦15.9cm。冒頭「雅章卿合点并添削」、裏端書「松平彈

正大弼殿詠歌手跡」、四季題・恋題・雑・名所】

《資料5》浅野綱晟詠草十四首 【書跡267-4。巻状一枚15.5×87.4cm。冒頭「雅章卿合点并添削之愚詠」、月題・句題。】

《資料6》浅野綱晟詠草断簡春題三首 【書跡267-6。切一枚16.1×17.7cm。歌題「早春霞・早春鶯・早春梅」】

これらは、浅野綱晟が池田綱政へ書き贈った書状や詠草であり、二人が親密に交流していたことを示す貴重な第一次資料である。このうち《資料1》・《資料3》については翻刻を次頁に掲載した。

まず、浅野綱晟年始書状（資料1）には「正月七日」と記されているが、年の記載はない。しかし、《資料1》⑰「学びえぬ」歳暮の和歌が、寛文十年二月初めに出来上がった浅野綱晟詠草二十首（資料2）の和歌⑱と共通することや、その書状内容からも、寛文十年のものと考えられる。したがって、寛文十年一月は両者ともに在国中であり、《資料1》は広島から岡山へ届けられたものということになる。その主な要旨は以下の通りである。

(1) 池田綱政から届けられた年始書状への御礼 ①～②、②⑥～②⑦（行目）

〔上段〕

- ②⑥ 尚々、早々御飛札
- ②⑦ 忝存候。御詠歌も候ハ、
- ②⑧ 承度存候。以上。
- ① 新春之為御慶一昨日者
- ② 早々御飛札忝存候。先以
- ③ 江戸御静謐
- ④ 公方様益御機嫌能年始之
- ⑤ 御儀式相済可申と恐悦
- ⑥ 御同然奉存候。次御同名
- ⑦ 新太郎殿御無事御出府
- ⑧ 可被成と察存候。其表
- ⑨ 貴様御堅固御越年
- ⑩ 珍重存候。立春并歳暮之
- ⑪ 御佳作も候哉と承度
- ⑫ 存候。愚詠御なくさみ二
- ⑬ 懸御目候。つたなき詞ながら

〔下段〕

- ⑭ 爰元二ハ見せ可申處も
 - ⑮ 無御座候故、如此二御座候。
 - ⑯ 立春
 - 山のはも遙に見えて出る日の
ひかしを時と春ハ来にけり
 - ⑰ 歳暮に
学ひえぬ身の怠を思ふにも
なこりおはかるとしの暮哉
 - ⑱ 過し秋冬の詠歌共、雅章卿へ
 - ⑲ 可遣と存、少々書あつめ申候。
 - ⑳ 重而貴様迄遣し可申候。
 - ㉑ 被遣可被下候。拙者儀も
 - ㉒ 弥無異二令出国候。延引
 - ㉓ なから年始之為御慶
 - ㉔ 御飛札申奉候。尚期後
 - ㉕ 音之時候。恐惶謹言。
- 松弾正大弼
- 正月七日 綱晟（花押）
- 松伊予守様
- 人御中

〔上段〕

詠草二十首

綱晟上

①

萩風告秋

／＼^{昨日今日}ほに出すまた初しほの秋の色を

風にみた^{せた}せる萩のひとむら

②

薄似袖

／＼たか袖とむかしの秋もしのはれて

梅か香ならぬおはなにそとふ

③

稲妻

／＼露をのみあたる名にはたてしとや

こほれぬさきにやとるいなつま

④

名所月

／＼松風もま^へくらにたかくすみの江の

きしうつなみにやとる月かけ

⑤

山家月

／＼ことしけき世のほかにして松のか^{戸の}と

〔下段〕

⑪

初冬時雨

／＼^{たえわひ}あたに見しきのふの秋のさひしさを

つきてふりぬるはつ時雨かな

⑫

寒芦

／＼ふゆかれはかこふたよりもなには江や

芦間^{あらはに}の家のみえてさひしき

⑬

冬月

／＼^{はるあきの}あはれしれ花も紅葉もひとさかり

見はて、のこる冬の夜の月

⑭

雨後月 秋の題二つら、如何

雨はるゝのきのつらゝの玉すたれ

さし入月にそふひかりかな

⑮

鷹狩

／＼日をかへ^{山のすその、}すたれともあれなかり衣

やまもとくらきとりの落草

さすかさしいる月もしつけき
まつわさなれや山のはの月

⑥ 田家月

賤のをは玉の臺もこゝそとや

かりほの庵に月をみるらん

⑦ 雲間雁

夕暗はをのかなれこし雲路をも

たとくしとやかりのなくらん

⑧ 聞鹿

月は今あり明かたの山のはに

こゝろをくたくやさをしかのこゑ

⑨ 虫

かせふけはたえぬ物とやなく虫の

こゑよりをつる秋のゆふ露

⑩ 終日翫菊

朝風を袂にしめて夕露の

むすふもあかぬ白菊の花

⑩ 網代

網代木にいさよふなみも音たかく

ひをへて寒きうちの川風

⑪ 竹雪

窓ちかくうちなひく竹のよのほとに

つもるかゆきの下をれの声

⑫ 年暮

まなひえぬ身の怠をおもふにも

なこりおほかるとしのくれかな

⑬ 海路

哀またおなしうきねの友なれや

なみにやとかる沖のつり舟

⑭ 祝

もろこしのためしにも引あつさゆみ

やまとの国のおさまれる世を

寛文十年二月初二出来

〔上段〕

- ④① 尚々、思召歌御飛札忝
- ④② 存候。此節ハ御氣分も御快候由
- ④③ 日出度存候。御詠歌共弥御見せ
- ④④ 被成可被下候。先日遣候柿ノ
- ④⑤ 風味御心ニかなひ、御痰ニも能覚
- ① 御飛札拜見。先以江戸御静謐
- ④⑥ 候間、追而可被仰越由
- ② 公方様益御機嫌能被為成御座候旨
- ④⑦ 大慶存候。重而是今
- ③ 承及恐悦御同意御座候。御同名
- ④⑧ 遣し可申候。此辺御用候事も
- ④ 新太郎殿御氣分相替處
- ④⑨ 候者、御心安可被仰聞候。勿論
- ⑤ 無御座候由、先日御次ニ被仰聞
- ⑤⑩ 此方今其通と存、罷出候。以上。

〔下段〕

- ②① 内合点之分書付、懸御目候。
- ②② 添削何も尤成儀と存候。其元今
- ②③ 御詠被遣候間合点候て参候ハ、
- ②④ 御見せ可被成由忝存候。必一覽
- ②⑤ 仕度存候。雅章卿今程ハ憚二而
- ②⑥ 可有之と思召候旨左様と相見、
- ②⑦ 愚詠も早々合点候て給候。其頃迄二
- ②⑧ 有紋紫革之事申遣候へハ免状
- ②⑨ 被相調候。貴様七月比今御足
- ③⑩ 痛候へは蹴鞠御懈怠候へ共、
- ③① 春かけて御養生之ためにも
- ③② 折々御興行可被成由尤御事候。
- ③③ 次ニ落葉之愚詠可有之と思召候由
- ③④ 一両首書付申候。
- ③⑤ 落葉

- ⑥ 一段之御事存候。其元寒氣之
 ⑦ 節候へ共、夏比ふハ御病氣少々
 ⑧ 御快折々殺生ニも御出被成候也
 ⑨ 珍重存候。就其御自身應々
 ⑩ 鉄炮之雁并あみ塩辛海月
 ⑪ 被懸御意御厚志之至忝
 ⑫ 存候。則可致賞味候。其許
 ⑬ 例年ハ暖氣にていまた雪も
 ⑭ 降不申候間、春ニ成候ハ、余寒
 ⑮ 甚敷御座候と思召候由、当地も
 ⑯ 先日雪降候。以後時分
 ⑰ 長閑御座候。先頃御次ニ今度
 ⑱ 雅章卿へ遣候愚詠御覧可
 ⑲ 被成由此比参候間、是今
 ⑳ 遣可申ヲ幸と存、廿首遣候。

色こきハまつさきたちて紅葉、の

もろきや人の老をしるらん

③⑥ 風前落葉

さそひ行風よりのちの梢にも

哀木葉のたえて残れる

③⑦ 落葉如雨

たえやらて雨よりしけくふるまゝに

庭ハ紅葉のふちとなりぬる

③⑧ 先日も申候通遠のき一入不成

③⑨ 候へ共御慰と存、御目ニかけ候。思召歌も候者

④⑩ 被仰聞可被下候。恐惶謹言。

松彈正大弼

十一月廿四日 綱晟(花押)

松伊予守様

人御中

(2) 池田綱政の和歌（立春并歳暮）を請い求めること（10）（12）

（27）（28）行目）

(3) 自詠歌（立春・歳暮の二首）の披露（12）（17）行目）

(4) 飛鳥井雅章が添削した「過ぎし秋冬の詠歌」（昨年の寛文九年に秋冬で詠んだ和歌ども）

をお見せするという約束（18）（20）行目）

この要旨(4)に該当する箇所「過ぎし秋冬の詠歌共、雅章卿へ遣はすべしと存じ、少々書きあつめ申し候。重ねて貴様まで遣はし申すべく候」（18）（20）行目）とあり、この「過ぎし秋冬の詠歌共」がどの程度の歌数か不明であるが、浅野綱晟詠草二十首（資料2）の前身に相当するものと考えられる。

次いで浅野綱晟詠草二十首（資料2）は、「荻風告秋」から「年暮」にかけての秋冬題の18首と「海路」「祝」題からなり、各和歌に付された合点や添削（一部を除き）が朱書きにされている。墨書きと朱書きは同筆と思われ、飛鳥井雅章の真蹟（第二章《資料7》《資料9》《図版1》など）とは異なるので、朱書き部分も浅野綱晟自筆と見て良い。つまり《資料2》は、「過ぎし秋冬の詠歌共」（資料1）（18）行目）が飛鳥井雅章から添削されて戻ってきて、その添削内容を池田綱政に見せるため新たに書写して添削を朱で付したものである。末尾に記されている

「寛文十年二月初出来」については、飛鳥井雅章へ提出するために書き集めた「過ぎし秋冬の詠歌共」の完成日か、または池田綱政へ贈るため添削を書き入れた二十首（資料2）の完成日か判断しかねるが、いずれにせよ池田綱政へ届けられたのは二月初め以降ということになる。

また、編年であまれている綱政自筆自撰家集『愚吟草』には、年始書状（資料1）と詠草二十首（資料2）に関連すると思われる贈答歌が寛文十年春の並びに所収されている（第四章《資料11》参照）。

次に浅野綱晟書状（資料3）は、年始書状（資料1）と同様に年の記載はないが、その内容から寛文十年十一月のものと考えられる。したがって両者ともに江戸にいた頃のものということになる。主要要旨は次の通りである。

(1) 池田綱政の病氣快復への喜び（6）（9）、42）（43）行目）

(2) 飛鳥井雅章添削の「廿首」を池田綱政にお目にかけること（17）（22）行目）

(3) 飛鳥井雅章添削の詠歌を見せてくれるという池田綱政の約束に感謝の意（22）（25）行目）

(4) 飛鳥井雅章による愚詠添削および蹴鞠免状（有紋紫革）申

請のこと(25)～(29)行目)

(5) 池田綱政の足痛・蹴鞠興行に関すること(29)～(32)行目

(6) 池田綱政から請い求めた自詠歌「落葉」題の三首)の

披露(33)～(39)行目)

(7) 池田綱政の和歌を請い求めること(39)～(40)、(43)～(44)行目)

まず、要旨(2)に該当する箇所「先頃御次に今度雅章卿へ遣はし候ふ愚詠御覽成さるべき由、此比参り候間、是より遣はすべく申すを幸ひと存じ、廿首遣はし候。内合点の分書き付け、御目に懸け候。添削何も尤も成る儀と存じ候」(17)～(22)行目)とある。つまり、飛鳥井雅章から「愚詠」の添削が戻ってきて、その添削内容を付して池田綱政へ遣わした「廿首」が浅野綱晟詠草二十首(資料2)と考えられる。

また、要旨(4)の該当箇所「雅章卿今程は憚りにて之有るべしと思し召し候旨、左様と相見、愚詠も早々合点候ひて給ひ候。其頃までに有紋紫革の事申し遣はし候へば、免状相調へられ候」(25)～(29)行目)とある。この「雅章卿今程は憚りにて之有るべし」と池田綱政が指摘したというのは、この時期に飛鳥井雅章は武家伝奏(一六六一年～七〇年)をつとめており、そのことに関する指摘とも考えられる(橋本政宣氏「吉田家の諸社家官位執奏運動」・『国立歴史民俗博物館研究報告』第148集・二〇〇八年十二

月)。そういうこともあって、浅野綱晟が所持する「有紋紫革」の免状は寛文十一年十一月一日付であるので、結局は免状申請のことを述べていたこの書状(寛文十年十一月廿四日付)から一年近く経過してしまつたことになる。そして「愚詠も早々合点候ひて給ひ候」(27)行目)とある浅野綱晟の「愚詠」に飛鳥井雅章の合点を付したものが、詠草五十三首(資料4)となつた可能性が高い。浅野綱晟書状(資料3)③7「たえやらで」(落葉如雨)の和歌が、詠草五十三首(資料4)の和歌②4に一致するからである。

二、飛鳥井雅章による和歌指導と池田綱政の定数歌

寛文十年前後の飛鳥井雅章は、従一位権大納言で武家伝奏も兼任(一六六一年～七〇年)していたこともあって、京・江戸間を何度も往還しており、和歌においては明暦三年に後水尾院より古今切紙伝授を受け(『古今集御講尺聞書』、後水尾院歌壇の中心的歌人として活躍していた。そうした中、飛鳥井家の宗匠として大名家・高家の歌鞠門弟の指導にも当たっていた。

さて、先の浅野綱晟書状(資料3)には「其元より御詠遣はされ候間、合点候ひて参り候はば御見せ成さるべき由、忝く存

《表2》寛文十年前後詳細年表

〔 〕 は本文中の資料番号、----はいつ置かれたか不明なもの、
 [...] は原物として確認できないもの。

寛文 9 己酉 1669		寛文 10 庚戌 1670		寛文 11 辛亥 1671		寛文 12 壬子 1672	
浅野綱盛		池田綱政		飛鳥井雅章		松三本懸免状	
12月27日	任持従、禪王太師	12月27日	任持従、禪王太師	12月27日	任持従、禪王太師	12月27日	任持従、禪王太師
1月2日	年頭登城(任持後の御礼)	1月2日	年頭登城(任持後の御礼)	1月2日	年頭登城(任持後の御礼)	1月2日	年頭登城(任持後の御礼)
1月23日	試筆「14和歌52」	1月23日	試筆「14和歌52」	1月23日	試筆「14和歌52」	1月23日	試筆「14和歌52」
3月27日	江戸	3月27日	江戸	3月27日	江戸	3月27日	江戸
5月29日	江戸	5月29日	江戸	5月29日	江戸	5月29日	江戸
9月23日	江戸	9月23日	江戸	9月23日	江戸	9月23日	江戸
1月7日	年始書状「1」	1月7日	年始書状「1」	1月7日	年始書状「1」	1月7日	年始書状「1」
2月出来	礼状「11和歌②」	2月出来	礼状「11和歌②」	2月出来	礼状「11和歌②」	2月出来	礼状「11和歌②」
3月4日	返事「11和歌②」	3月4日	返事「11和歌②」	3月4日	返事「11和歌②」	3月4日	返事「11和歌②」
3月26日	江戸	3月26日	江戸	3月26日	江戸	3月26日	江戸
4月4日	「明日船出」(三田屋出帆)	4月4日	「明日船出」(三田屋出帆)	4月4日	「明日船出」(三田屋出帆)	4月4日	「明日船出」(三田屋出帆)
6月	江戸	6月	江戸	6月	江戸	6月	江戸
7月	足が癒む②	7月	足が癒む②	7月	足が癒む②	7月	足が癒む②
8月	百首(前中後)	8月	百首(前中後)	8月	百首(前中後)	8月	百首(前中後)
9月	書状「3」	9月	書状「3」	9月	書状「3」	9月	書状「3」
11月24日	有教兼章を申請「3」	11月24日	有教兼章を申請「3」	11月24日	有教兼章を申請「3」	11月24日	有教兼章を申請「3」
12月24日	書状「3」	12月24日	書状「3」	12月24日	書状「3」	12月24日	書状「3」
1月15日	江戸	1月15日	江戸	1月15日	江戸	1月15日	江戸
3月25日	江戸	3月25日	江戸	3月25日	江戸	3月25日	江戸
4月18日	父光盛致仕、家督相続	4月18日	父光盛致仕、家督相続	4月18日	父光盛致仕、家督相続	4月18日	父光盛致仕、家督相続
7月21日	御祝儀「2」(済美書)	7月21日	御祝儀「2」(済美書)	7月21日	御祝儀「2」(済美書)	7月21日	御祝儀「2」(済美書)
12月15日	痘瘡発病「済美書」	12月15日	痘瘡発病「済美書」	12月15日	痘瘡発病「済美書」	12月15日	痘瘡発病「済美書」

じ候。必ず一覽仕りたく存じ候」(22)～(25)行目)とあるので、浅野綱晟が見たがつていた池田綱政の詠草は、飛鳥井雅章の合点や添削が付されたものということになる。

和歌の添削資料そのものは、歌書の清書段階で破棄されることもあり、残されることが稀とも言われるものであるが、林原美術館には、この時期(寛文十年前後)の池田綱政の詠草に対する飛鳥井雅章自筆の添削資料や、その添削を書き入れた池田綱政の定数歌が数種類存在する。おそらくこの池田綱政の定数歌が浅野綱晟へ贈られたものと考えられ、その手控本として池田家に残されたものが林原美術館に所蔵されることになったと考えられる。

《資料7》飛鳥井雅章筆三十七首添削【書跡2754。横長紙二枚、右端一箇所糸綴、143×424cm。歌題「春立けふの」～「庭の落葉を」の添削】

《資料8》池田綱政七十七首【書跡284192。袋綴一冊212×154cm。外題「雅章卿合点庚戌季春孟秋両度七拾七首」。前半の三十七首(冒頭「庚戌春合点、歌者己酉孟冬及臘月古今仮名題」。歌題「春たつけふの」～「庭の落葉をおしみて」)の合点・書き入れは《資料7》と一致】

《資料9》飛鳥井雅章筆百首添削【書跡2751。折状四枚331×485cm。歌題「年内立春」～「片恋」の添削。《図版1》は一枚目】

《資料10》池田綱政病中吟詠百首【書跡284191。袋綴一冊180×159cm。外題「雅章卿辛亥合点庚戌寛文十年中百首病中歌吟」内題「百首病中吟詠之」。歌題「年内立春」～「片恋」。合点・書き入れは《資料9》と一致。《図版2》は表紙と冒頭】

これらの複雑な成立過程や関連資料については別の機会に詳しく述べたいと考えているが、まず池田綱政七十七首(資料8)の奥書を見ると、その成立過程が分かる。以下は釈文で示す。三十路^{みそぢ}あまり七つの言の葉は、戌の年の霞立ち深むころ都に遣はし侍りけるを、公の暇^{おほやけいとま}なくして東の旅宿^{あづま}のすさみに具して下られ侍りぬ。弥生の末つ方に帰り給ふ頃、我はまた東の勤^とめに下り侍るに、駿河の国富士川のほとりにて行き会ひぬ。雅章卿より物語し侍らんこと有り。些かのほど会ひたき由申し送られしかば、やがていはふちといふ怪怪^{あや}しの賤屋に立ち寄りて侍りけるに、とばかり有りておはしぬ。この一卷を取り出で給ふ。あらまし。此道の物語・口伝へなどし給ひて、立ち別れぬ。其タベ

清見潟に留まり給ふ由聞きて、申し遣はしける
別れ行く名残り思へば清見潟我も関守る身とやならまし
〔段落二開え候〕

あくるつとめて、返しに

清見潟心をとめて名残思ふ人の言葉や波の関守

ここかしこ目に触れし勝景を詠みける歌も多く合点を加へられ給はりぬ。

同じき夏遣はしける四十路の歌は、心地例ならず侍りし折々のすさみに書き集め侍るなり。猶人の見る目をかり侍らん藻屑にもあらずかし。二十とせ余り合点を給はりし歌数あまた侍れども、同じ年の中を選び集めて、これには記しぬ。

とあり、池田綱政七十七首（資料8）の前半の三十七首（三十路あまり七つの言の葉）と後半の四十首（夏遣はしける四十路の歌）の両方の成立事情が奥書として記されている。

まず、前の三十七首については、寛文十年の霞が深まる頃に飛鳥井雅章へ贈り届け、三月末に江戸から都へ向かう雅章と、岡山から江戸へ向かう綱政は、富士川の辺で行き会い、そこで綱政は雅章から直に添削原本（資料7）を手渡される。その際に雅章は「あらまし・此道の物語・口伝へなど」を語り、綱政は直接和歌の指導を受け、その後別れたという。次いで後の

四十首は、夏頃病中に詠んだ和歌から選り集めて、雅章に遣わしたものである。

その後、綱政は前の三十七首と後の四十首とを合わせて七十七首にし、雅章の添削内容（資料7など）や奥書を書き加えることで、完結した一つの作品（資料8）に仕立てたのである。このように自身の詠草・定数歌に対して飛鳥井雅章の添削や自身による奥書を加えるということは、人に見せるということを前提に作られた歌集であったと言える。その対象は飛鳥井雅章や浅野綱晟であったと考えられ、作るきっかけは浅野綱晟から請い求められたことによるものと思われるのである。

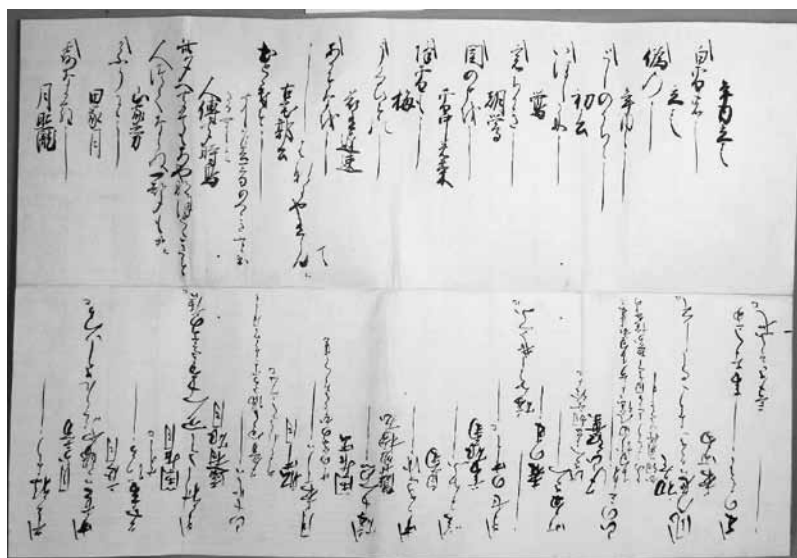
なお、後の四十首の奥書には「二十とせ余り合点を給はりし歌、数あまた侍れども」とあるので、寛文十年の段階で池田綱政（33歳）は飛鳥井雅章から二十年余りも和歌を学んできたということがその記述から明らかになる。

次に、池田綱政病中吟詠百首（資料10）の奥書（引用は歌文で示す）は、

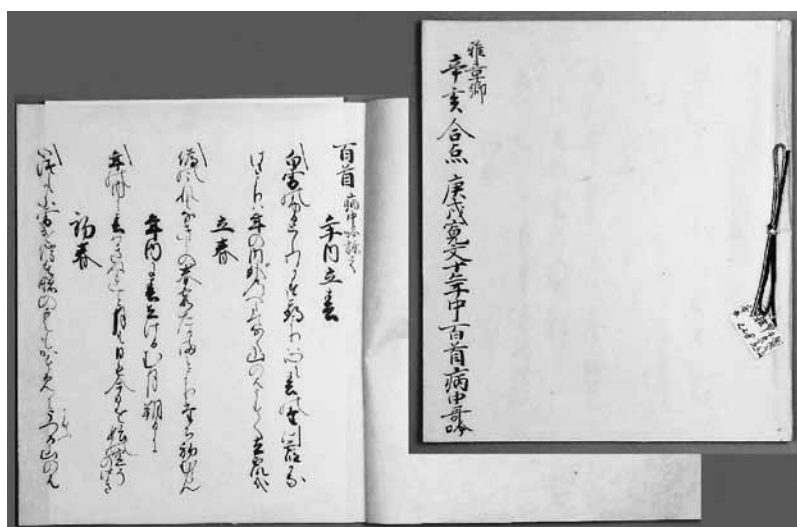
百首之内、合点七拾三首、内褒美二十四首、

外可勝可聞十三首

此百草は、庚戌の夏卯月の初めつ方よりいたわること侍りし心地の年、うち伏しがちにのみ暮らし侍るに、この



〔図版1〕 飛鳥井雅章筆百首添削（資料9） 折伏一枚目



〔図版2〕 池田綱政病中吟詠百首（資料10）の表紙と冒頭部分

たびは例にかはりて身じろきも心に任せず、身柄みからかくてはえ堪たうまじき程に悩み侍りける。されども些ちかゆるびぬる暇ひま々、あぢきなき心の筋すぢを里さとびたる言の葉に述べ、はかなき筆のすさみに書き連ねし内を、十づつ十の数に選えり出でて、散位雅章さんゐあきら卿のもとへ贈送せしもの也。

永らへば又やしのばむ百草の花の昔を思ひ出でてもある。寛文十年四月初め池田綱政は「いたわること」つまり病気で体も動かせないほどになり、病状が安定して暇なときに詠んだ和歌の中から百首（十づつ十の数）を選び出し、飛鳥井雅章に添削してもらったという。その添削原本が《資料9》であり（《図版1》参照）、その添削結果が奥書冒頭の「百首之内、合点七拾三首、内褒美二十四首、外可勝可聞十三首」である。また「散位雅章卿」や外題「雅章卿辛亥合点」（《図版2》）とあることから、この百首歌（資料10）の成立は寛文十一年となる。

なお、この時の池田綱政の病氣快復については浅野綱晟にも伝えられており、浅野綱晟書状（資料3）に「夏頃よりは御病氣少々御快の折々に殺生にも御出で成され候や、珍重に存じ候」（7）（9行目）、「此の節は御氣分も御快候由、目出たく存じ候」（42）（43行目）とある。また、池田綱政から病氣快復の折の狩りて獲れた雁などが贈られ（9）（12行目）、一方、浅野綱晟が

「御痰」にも効くと思ひ贈った柿は風味よかったと池田綱政から伝えられ、浅野綱晟は再び柿を贈ることにした（44）（48行目）。この病氣快復を受けて、「御詠歌共弥御見せ成され下さるべく候」（43）（44行目）と浅野綱晟は池田綱政の詠歌を催促する。

したがって、この池田綱政病中吟詠百首（資料10、図版2）も先の池田綱政七十七首（資料8）と同様に、浅野綱晟の催促によつて作成され贈られたものと考えられるのである。

三、飛鳥井雅章が発行した蹴鞠免状

浅野綱晟書状（資料3）には、「其頃までに有紋紫革の事、申し遣はし候へば、免状相調へられ候」（27）（29行目）とあり、浅野綱晟の蹴鞠免状（有紋紫革）申請のことや、続いて池田綱政の足痛・蹴鞠興行に関することが記されている。

そこで、飛鳥井雅章の歌鞠門弟である池田綱政と浅野綱晟の蹴鞠免状取得の比較を行った（表3参照）。池田綱政の免状は「蹴鞠免状之次第」（岡山大学附属図書館池田家文庫R5-95-9、平成27年度岡山大学附属図書館池田家文庫絵図展「京都と岡山藩」図録）に拠り、浅野綱晟は『大日本古文書家わけ第二・浅野家文書』（東京大学史料編纂所）に拠っている。

《表3》蹴鞠免状取得の比較

池田綱政 (承応二年 1653.12.11、元服、従四位下、侍従)	浅野綱晟 (寛文八年 1668.12.27、侍従、弾正大弼)
①紫組冠懸緒 承応二年三月五日 1653.03.05	①紫組冠懸緒 寛文九年正月廿三日 1669.01.23
②紋紗之上 并絲紐 同 1653.03.05	②紋紗上 并絲紐 寛文九年三月廿七日 1669.03.27
③紫下濃袴 并錦革鴨沓 同 1653.03.05	③紫下濃袴 并鴨沓錦革 同 1669.03.27
④紫袴 寛文三年三月八日 1663.03.08	④紫葛袴 寛文十一年三月十五日 1671.03.15
⑤三本松 同 同 十二日 1663.03.12	
⑥十骨扇 同 四月十一日 1663.04.11	
⑦八境之図 同 同 1663.04.11	
⑧金紋紗上 同四年三月十八日 1664.03.18	
⑨有紋紫革 同 九月廿九日 1664.09.29	⑤有紋紫革 寛文十一年十一月朔日 1671.11.01
	⑥松三本懸 寛文十二年閏六月廿八日 1672.06.28
	⑦鵝上 寛文十二年十二月十五日 1672.12.15
⑩一日晴袴 并緋裏 同十二月八日 1664.12.08	
⑪朽葉色袴 同五年三月廿五日 1665.03.25	
⑫無紋紫革 同 五月朔日 1665.05.01	
⑬紫上 同七年八月廿三日 1667.08.23	

最初の蹴鞠免状である「紫組冠懸緒」を、池田綱政は元服前の16歳で取得しており、一方、浅野綱晟は侍従・弾正大弼となつてまもなくの33歳で取得している。したがって浅野綱晟は池田綱政のことを「兄弟子」として頼りにしていたと考えられる。

また、先に挙げた池田綱政七十七首（資料8）の後の四十首の奥書にあった「二十とせ余り合点を給はりし」という記載にも合致する。つまり、池田綱政は元服して侍従となつた16歳の前から、蹴鞠だけではなく和歌も同時に飛鳥井雅章に学んでいたということを示している。入門当初から「歌鞠門弟」であったのである。

それでは、なぜ家柄や経歴が似た二人の間で免状取得年齢の差が生じたのか。その参考となるのが、桑山浩然氏「飛鳥井家が烏帽子懸緒の許可権を得ること」（編『蹴鞠技術変遷の研究』・平成三年度科学研究費補助金研究成果報告書・東京大学史料編纂所・一九九二年三月）や渡邊融氏「近世蹴鞠道飛鳥井家の一年」（『放送大学研究年報』第十七号・二〇〇〇年三月三十一日）の指摘である。渡邊融氏の指摘部分を引用すると、

…通例では、大名や高家が従四位下侍従に任官すると参内用の正装として紫組冠懸緒が必要となるので、形式的に飛鳥井家と門弟契約を結び、着用の願いを取次いで貰

うことになっていた。そして、これに対する礼金がかなり高額であり、武家にとつての癪の種になっていた。

とある。つまり、池田綱政と浅野綱晟の取得年齢の差は、「侍従」となった年齢の違いによるものと考えられるのである。

ちなみに、浅野綱晟が「紫組冠懸緒」の免状に対する御礼を行った記録が、広島藩浅野家の正史『済美録』（引用は、東京大学史料編纂所蔵の写真帳による。）にある。

ただでさえ侍従任官に対する御礼の出費がかなりかさむ上に、「紫組冠懸緒」の使用許可の御礼として「禁裏御所へ銀五枚。

（後水尾徳）

（明正徳）

（後西徳）

法皇御所・本院御所・新院御所・女院御所・女御様へ同三枚宛。

御献上飛鳥井大納言雅章卿へ同三枚被進、雑掌へ同壹枚被遣」

（『天心公済美録』巻八）とあり、そのうえ蹴鞠免状の御礼として、

「〔寛文九年正月〕同十二日飛鳥井大納言雅章卿より蹴鞠為

御門弟御冠掛御免状等到来ニ付〔割注省略〕為御祝儀御太刀金

馬代御樽者一荷二種御書を以被進」（同上）とあり、飛鳥井雅

章へ太刀金馬代（大判一枚）、一荷二種（酒一斗樽二つと肴二種）

を贈っている。

四、池田綱政の自筆自撰家集

林原美術館が所蔵する池田綱政の自筆自撰家集は、重複する内容を持つ草稿本や清書本なども含め二十冊程度あり、いずれも編年であまれている。その中に、浅野綱晟や飛鳥井雅章との贈答歌を収録する家集が存在する。以下の引用は釈文で示す。

《資料11》『愚吟草 甲』【書跡2953。綴葉装一冊、203 ×

14.9cm】、18「オーウ

やがて程近き国の守より春の歌請はれしまま書き

付けて遣はしける奥に詠みて書き付けて遣しける

今よりは寄るべとぞ思ふ和歌の浦の波に漂ふ沖の友船

返し

つなあきつ
綱晟朝臣

波わくる沖の友船しるべせよ和歌の浦はに孤立つ身を

同じ方より日頃詠み置しとて二十首の歌枕書き

連ねて給はりしに、詠み書く返しにさし添へぬ

うらやまし和歌の浦人数々の拾ふかひ有る玉の光は

又返し

つな
綱晟朝臣

和歌の浦や君が言葉の寄る波をかひある方と猶拾はまし

最初の贈答歌の詞書に「程近き国の守より春の歌請はれし」とあるのは、浅野綱晟年始書状（資料1）の「立春並びに歳暮の御佳作も候やと承りたく存じ候」（10～12行目）に一致する。次いで詞書に「請はれしまま書き付けて遣はしける」とあるので、池田綱政は自詠の「春の歌」（春題）または「立春并歳暮」（四季題）の和歌を浅野綱晟に贈ったことが分かる（第二章《表2》詳細年表参照）。それがどのようなものであったかは不明であるが、「奥に」とあるので、ある程度まとまった詠草であったと思われる。その奥書に書き付けた「今よりは」の和歌（〔訳〕今からは頼みとする所と思います。和歌の浦の波に漂う沖の友〔船を〕和歌の世界に入り同じ師〔雅章卿〕と共に学ぶ君のことを〕）では飛鳥井雅章の門弟として共に和歌を学ぶ「友船」と浅野綱晟を譬え、それを受けて浅野綱晟の「波わくる」の和歌（〔訳〕和歌の浦の波を押し分け進む沖の友船―同じ師〔雅章卿〕と共に和歌を学ぶ君よ、どうか導いてください。和歌を独りで学んでおりますこの我が身のことを〕）では兄弟子の池田綱政に導いてくれるよう頼む内容になっている。

次の贈答歌の詞書に「同じ方より日頃詠み置きしとて二十首の歌枕書き連ねて給はりし」とあるのは、浅野綱晟詠草二十首（資料2）のことと思われる。二十首を受け取った池田綱政は、「詠み書く返しにさし添へぬ」とあるので、二十首への返事に「うらやまし」の和歌（〔訳〕「うらやましい」ものです。和歌の浦人が拾う貝―和歌を詠んだ君がたぐん頂いた学び甲斐がある玉の光のような雅章卿の合点といふは、））を書き添えた。その和歌の返事として浅野綱晟が詠ん

だ「和歌の浦や」の和歌（〔訳〕和歌の浦―寄せる波―和歌について君が私に寄せてたいものと思つた。和歌の言葉、学び甲斐があるものと思ひ、いっそう頂きたいと思つた。〕）では、よりいっそう池田綱政の和歌を請い求める内容となっている。

また、これらは飛鳥井雅章の歌翰門弟となつて一、二年程度という浅野綱晟の贈答歌であるが、見立や掛詞・縁語などの技巧が使われており、和歌の基礎力を有しているので、歌翰門弟となる以前から和歌を学んでいたことは確かである（第五章《資料14》の「新山八景」は寛文三年¹⁶⁶³の詠）。

そして、この《資料11》の贈答歌は、先の池田家旧蔵の書状や詠草（資料1～6）には含まれておらず、別の機会に詠まれたものである。手紙や原本としては確認できないが、二人の間で何度も和歌の交流が行われていたことを示す資料である。

《資料12》『愚詠下書 甲寛文十年庚戌 同十一年辛亥』【書跡28+31。袋綴一冊

18.7×13.5cm、28丁

百首歌を人の請ひしに遣はしければ、返しに書き添へて来し侍りける

色も香も又たぐひなき百草もの花はいかなる種やまきけん

又異草ことを遣はすとて、「色も香も」といひし歌の返しながら

かき寄する浦の藻屑も取り上げて見る人からにかいもこそあれ

最初の詞書「百首歌」および和歌「色も香も又たぐひなき百草」とは、先に挙げた池田綱政病中吟詠百首（資料10）のことと考えられる。その百首歌を「人の請ひしに遣はしければ」とあり、人に請い求められたので贈ったという。ここでは「人」としか書かれていないが、浅野綱晟であった可能性は高い。その百首歌の御礼の返事に書き添えられていた「色も香も」の和歌（訳「色も香りも類いなく花のような君の百首歌は、」では、どうしてそのような素晴らしい百首歌が詠めるのかと尋ねる内容になっており、和歌を学ぼうとするその姿勢は、今までの資料に登場する浅野綱晟の姿と重なる。また、この「色も香も」の和歌は、池田綱政病中吟詠百首（資料10）の巻末に散らし書きにされていた和歌「永らへば又やしのばむ百草の花の昔を思ひ出でても」
（訳「生き永らえと再び懐かしむことがあろう
うか、この百首歌を詠んだ昔を思い出しても」） に対する詠歌と思われる。

次の詞書に「異草を遣はす」とあるので、池田綱政は同じ人物に別の詠草も贈り、先の「色も香も」の返歌として池田綱政が詠んだ「かき寄する」の和歌（訳「掻き集めた浦の藻屑——掻き集めた私の詠
甲斐がある
のですよ」）では、見てくれる人がいるから遣り甲斐があるのだと

返答している。この「人」との一連のやり取りは、先に挙げた「和歌の浦の波に漂ふ沖の友船」（同じ師に共に和歌を学ぶ同士）である池田綱政と浅野綱晟の姿と重なるのである。

さて、この《資料12》の贈答歌は、寛文十一年辛亥の「八月十五夜」以降「八月の末つ方」の間に採録されており、その間に贈答が行われていたということになる。これにより、寛文十一年という成立年しか分からなかった病中吟詠百首（資料10）であったが、寛文十一年八月前半には成立していたということが判明する。つまり、池田綱政が寛文十年秋頃に百首歌を飛鳥井雅章へ贈り、寛文十一年に入って雅章からその添削（資料9）が届けられ、八月前半には病中吟詠百首（資料10）は出来上がっていたということになり、それが広島在中の浅野綱晟へ贈られたということになる。よって、池田綱政が百首歌を編んで雅章へ届けてから百首歌をこの「人」に贈るまでに一年は経過していたということになる。この遅延は、浅野綱晟書状（資料3）にあった「雅章卿今程は憚りにて之有るべし」（25）（26行目）と池田綱政が指摘していたことに関連するのも知らない。

《資料13》『愚吟草甲』【書跡 2953】、27丁オーウ

大納言^{まさめきら}雅章卿、関東より^{かへ}帰^{のぼ}り上^{のぼ}り給ふに、富士の裾^{すそ}

にて行き会い、しばし物語して、たち別れぬ。その夕

べ清見^{ととみ}渴^とに留まり給ふ由聞きて申し遣はしける

別行く名残思へば清見^{ととみ}渴^と我も関守る身とやならまし

返し 雅章卿^{まさめきら}

清見渴心をとめて名残思ふ人の言葉や波の関守

この贈答歌は、池田綱政七十七首（資料8）の奥書にも掲載されていたものである。清見渴にいる雅章へ贈ったという綱政の「別れ行く」の和歌には、合点と「一段優美二聞え候」という雅章の添削が付されている。これは、七十七首（資料8）の奥書に「ここかしこ目に触れし勝景を詠みける歌も多く合点を加へられ給はりぬ」とあることから、綱政が詠んだ勝景の和歌と共に添削が加えられ綱政の手に戻ってきたのであろう。そして、この雅章の合点や添削は、綱政が自身の家集に採録する際にも付されたのである。

このように、浅野綱晟や飛鳥井雅章との和歌に関する交流の一連の出来事は、池田綱政の手によって家集載録の贈答歌へと文学性の高いものに昇華されていったのである。

五、広島藩浅野家旧蔵の綱晟詠歌資料

ここで、広島藩浅野家側の関連資料を示しておく。

《資料14》綱晟公御詠草【広島市立中央図書館浅野文庫蔵。内題「前霜臺源綱晟公御詠艸」。十四・五丁。和歌一行書。全百十一首。ト養狂歌集（刊本・うろこがたや新板・上下）・人麿伝記（写本）・近代秀歌（写本・朱書入）・仙洞御百首（写本）・綱晟公御詠草（写本）が合綴。表紙21×16cm】（以下の釈文には、通し番号001～111を付した。）

河時雨

024 定めなき 此間不知 しる飛鳥川かはる淵瀬に時雨降り

雨後冬月

033 雨はるる軒のつらの玉簾さし入月に添ふ光哉

寛文九年 試筆旧臘任侍従

052 君が代の恵みあまねく立春の光にあたる我ぞ嬉しき

歳暮

065 学びえぬ身の怠を思ふにも名残多かる年の暮哉

落葉如雨

076 絶えやらで雨より繁く降ままに庭は紅葉の淵と成ぬる

新山八景

巖嶋春霞

102 浦遠く霞に込めて春の色は顕れにけり巖嶋山

古寺晚鐘

108 古りにける尾長の松に風すぎて入逢の声を送る夕暮

広城夕照

109 道広き国を守りの高き屋に入り日の影や猶残るらん

この『綱晟公御詠草』の内題は「前霜台源綱晟公御詠艸」（霜台は彈正台の唐名）とあり、024番歌の二句目の空白に「此間不知」とあるので、綱晟没後に書写された家集ということになる。そして、052番歌は綱晟が侍従になった翌年の寛文九年正月に詠まれたものであり、102～109「新山八景」という一連の和歌は『天心公済美録』巻七・寛文三年癸卯にも「此歳¹⁶⁶³新山¹⁶⁶³郡安芸御茶屋出来：公、八景を詠じ給へる御歌とて^{管坊立告所蔵 會意雜得録}」として収録されており、飛鳥井雅章の歌鞠門弟になる以前の詠作である。しかも、全ての和歌を見ても雅章の合点や添削も一切付されていない。したがって、『綱晟公御詠草』は編年ではなく、浅野綱晟没後に編まれた他撰家集と考えられる。

さて、先に挙げた池田家旧蔵の書状や詠草資料において浅野綱晟の和歌は百首程度判明していたわけであるが、浅野家旧蔵

の『綱晟公御詠草』を加えると二百首程度が明らかとなった。しかし、それらには共通する和歌が存在する（表4参照）。

たとえば、033「雨はるる」（雨後冬月）の和歌は、綱晟詠草二十首（資料2）⑭と一致するが、その和歌⑭では「雨後月、題の下に「秋の題二つらら如何」という雅章の添削が朱で付されている。「雨後冬月」と「雨後月」の歌題はともに『新古今集』にある題で、「雨後月」題は秋上に所収されている。すなわち、「秋の題二」という雅章の指摘となったわけである。しかし、詠草二十首（資料2）の秋冬の季節の並び順から考えると、和歌⑭

《表4》池田家旧蔵詠草資料と『綱晟公御詠草』（資料14）との共通和歌

《資料1》⑰および 《資料2》⑱と一致	031歳暮「学ひえぬ…」
《資料2》と一致	②＝032薄似袖、⑤＝033山家月、⑦＝034雲間雁 ⑩＝035終日翫菊、⑫＝036寒声、⑭＝037雨後冬月 ⑰＝038窓竹、⑱＝039歳暮、⑳＝033祝
《資料3》⑳および 《資料4》㉔と一致	035落葉如雨「たえやられて…」
《資料4》と一致	㉑＝039掃衣、㉒＝036落葉如雨、㉓＝037寄木恋 49＝011菊川（四句目が異なる）

* ○番号＝池田家旧蔵詠草に付した通し番号。

* 000～111＝浅野家文庫『綱晟公御詠草』に付した通し番号。

は冬題で詠まれていたことは確かであり、この『綱晟公御詠草』によって「雨後冬月」題で詠まれていたことが明らかになるのである。つまり、雅章へ提出する際に「冬（月）」をうつかり誤脱して書写した結果の添削内容であった。浅野綱晟書状（資料3）で「添削何も尤も成る儀と存じ候」（22行目）と述べていたが、詠草二十首（資料2）において自身による誤脱と雅章の指摘とをありのままに掲載して池田綱政へ披露していたということからも、浅野綱晟の人柄がうかがえるのである。

このように、『綱晟公御詠草』には池田家旧蔵の詠草二十首（資料2）や詠草五十三首（資料4）との共通歌は十三首あるが、むしろ共通しない和歌のほうが多い。つまり、『綱晟公御詠草』は浅野綱晟の和歌を全て残すものではなく、それら以外にも和歌が詠まれていた可能性がある。

以上のことから、浅野綱晟は、池田綱政のように日頃四季の景物などの題で詠み集めた和歌の中から選りすぐった和歌を飛鳥井雅章に添削してもらい、そして池田綱政へ贈るため自詠歌に合点と添削をありのままに書き付けて届けたものが、『資料2』『資料4』『資料6』の和歌であった。そして、浅野綱晟没後に完全には残されなかった一部の和歌資料から他撰家集の『綱晟公御詠草』が編まれたものと思われる。

六、寛文十二年、交流最後の記録

¹⁶⁷²
寛文十二年四月十八日に浅野光晟（玄徳公）が隠居し、綱晟は藩主となる。同年六月十一日には池田光政が隠居し、綱政も藩主となった。そして、二人の和歌の交流を示す最後の記録が、浅野家の正史『天心公済美録』巻之十一下にある。

（寛文十二年六月）同十二日松平伊予守綱政君備前国主御

家督二付案するに、御父新太郎。為御祝儀太判壹枚被進案するに、七月廿

御書案に、御状令拝見ニ今度御家督被仰付被為御祝儀、来ル廿六日廿七日廿九日之内、可被召歌之旨忝存候。廿七日之朝以来可得御意之云々とあり。されと廿七日御座なされし事見る処なき故、爰に附して考に備ふ。

とあり、家督を継いだ池田綱政に対して浅野綱晟がその御祝儀として「大判一枚」（十両）を贈ったという記録である。

その割書において「綱政君への御書案」つまり浅野綱晟が池田綱政へ贈った書簡の案の一部が記されており、その中に「歌召さるべきの旨、忝く存じ候」とある。したがって、二人は藩主となっても和歌の交流があったことを示唆している。

以上示したように、寛文八年十二月二十七日に侍従に任官され、翌一月に飛鳥井雅章から紫組冠懸緒の免状を取得して以降、雅章の歌鞠門弟となった浅野綱晟は、寛文九年から兄弟子の池田綱政と和歌の交流を始めたと考えられる。そして、和歌の贈答や添削和歌を互いに披露すること、¹⁶⁶⁹「和歌の浦の沖の友船」として切磋琢磨し、研鑽を積んでいった。和歌の交流を始めてから三、四年後の寛文十二年には両者ともに家督を継いで藩主となったが、その交流は続いていた。¹⁶⁷²

しかし、同年十二月十七日暁より浅野綱晟は江戸藩邸にて「御頭痛強く御熱氣」（『天心公済美録』卷之十一下）となり、翌十八日に召し寄せられた公儀医師の塙宗悦と井関玄説から、疱疹の可能性があると診断が下される。塙宗悦老の薬で治療を続けられたが、翌一月二日の「夕七半時過ぎ御逝去遊ばされ」（同上）、享年37歳であった。

こうして、池田綱政と浅野綱晟の二人の交流は途切れてしまうことになったのである。

〈付記〉

本稿は、二〇一八年九月一六日開催のシンポジウム「林原美術館の資料と岡山池田家の文事―お殿様と王朝文化―」（共催 関西大学、林原美術館）における報告を基に加筆したものである。貴重な資料の閲覧をお許しいただいた林原美術館、広島市立中央図書館、東京大学史料編纂所のご厚情に心より御礼申し上げます。

（ふくどめ たまみ／本学非常勤講師）